Title	ロバート・オーエン研究にかんする最近の動向 : 'Robert Owen, prophet of the poor, essays in honour of the two hundredth anniversary of his birth', edited by Sidney Pollard and John Salt, with an introduction by Sidney Pollard, 1971, Londonを中心として
Sub Title	The recent tendency of the study of Robert Owen in Great Britain
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1972
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.65, No.9 (1972. 9) ,p.600(34)- 607(41)
JaLC DOI	10.14991/001.19720901-0034
Abstract	
Notes	学界展望
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19720901-0034

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ロバート・オーエン研究
にかんする最近の動向

—'Robert Owen, Prophet of the Poor, Essays in Honour of the Two Hundredth Anniversary of his Birth', edited by Sidney Pollard and John Salt, with an Introduction by Sidney Pollard, 1971, London を中心として—

飯 田 鼎

(1)

イギリスにおいては今もなお、Robert Owen と Keir Hardie の伝記は絶えることがない。それほどこの巨人にたいするイギリス国民の尊敬はあつく、この恩人にたいする親愛の情はきえることがない。それは一体何故であろうか。思うに、いくつかの理由が与えられるのであるが、少くとも2つの理由が考えられる。まず第1に、この2人は、イギリスのみが生み出すことのできた偉大な社会主義者であり、その独特な人間的魅力、すぐれた経験主義、大胆にして率直な人柄などである。つぎに、何と云っても、そのイデオロギーが、大陸の、とくにマルクス主義とは異なった独自のものであったこともまた見逃しえない特色であり、これらが、今日もなおイギリス人の心をひきつけて離さない

注(1) Keir Hardie の伝記として、最近のものは、Emays Hughes, Keir Hardie, 1956, London, および John Cockburn, The Hungry Heart, a Romantic Biography of James Keir Hardie, 1956. (永田正男, 宇佐美道雄訳「ケア・ハーディの小説風伝記」中央公論社, 1966年がある。なお Owen についての伝記として、Margaret Cole の Robert Owen of New Lanark (1953) は、もはや最新のものと云いがたいが、A. L. Morton, The Life and Ideas of Robert Owen, 1962, London はその独自の Owen 理解という点で注目に値する。Morton は亡き George Tate との共著, The British Labour Movement, 1770-1920 や A People's History of England の著者として、わが国でも広く知られているが、マルクス主義の立場に立っている著者が、Owen について書くことは珍しい。

(2) わが国の学界においても、Owen 生誕 200 年を記念する論文集があらわれたのであるが、これについては例えば、ロバート・オーエン協会編「ロバート・オーエン論集」(ロバート・オーエン生誕二百年記念)、家の光協会、1966年、および「経済学史学会年報」所収の拙稿「イギリス労働運動史上のロバート・オーエン」がある。また今井義夫教授の詳細な興味深い記念論文「ロバート・オーエンと現代——ロバート・オーエン生誕 200 年記念によせて」(工学院大学研究論叢第 9 号および白井厚「ロバート・オーエンと現代」(季刊「社会思想」2の2)もすぐれた研究である。

のであり、限りない親しみをおこさせるものと思われる。

たまたま 1971 年は、オーエン生誕 200 年にあたっていたので、さまざまな催しが行われたのであるが、何と云ってもここにとりあげた記念論集は、オーエン研究の現在の水準を示すものとしてきわめて重要である。ここには、第 1 級のオーエン研究家が、現代的な視点から、オーエン像を再構成することに努力しており、まことに壮観である。この論文集は、たんに、Owen の生誕 200 年を記念するにとどまらず、さらに現代におけるオーエン研究の到達水準を示すものとして注目に値するものである。そして、ここに掲げられている論文のそれぞれについて要点を紹介し、オーエン研究の現代的意義について考察することにしよう。

(2)

本書の構成は、Sidney Pollard による序論につづいて、つぎのような 12 個の論文が掲げられている。題名と著者を掲げておこう。

- (1) J. F. C. ハリソン「オーエン氏の新しい見解 (A New View of Mr. Owen—J.F.C. Harrison)
- (2) 都築忠七「ロバート・オーエンと革命的政治 (Robert Owen and Revolutionary Politics—Chushichi Tsuzuki)
- (3) R. G. ガーネット「ロバート・オーエンと協同体の実験」(Robert Owen and the Community Experiments—R.G. Garnett)
- (4) ハロルド・シルヴァ「教育家としてのオーエンの評判」(Owen's Reputation as an Educationist—Harold Silver)
- (5) アイリーン・イエオ「ロバート・オーエンと急

進的教養」(Robert Owen and Radical Culture—Eileen Yeo)

- (6) ジョン・サヴィル「J. E. スミスと 1833 年から 34 年にかけてのオーエン主義運動」(J. E. Smith and the Owenite Movement, 1833-4—John Saville)
- (7) A. J. ロバートソン「1800 年から 1825 年にかけてのロバート・オーエン、綿紡績業者——ニューラナーク」(Robert Owen, Cotton Spinner: New Lanark, 1800-25—A. J. Robertson)
- (8) W. H. オリヴァ「千年王国運動」(The Millennialist Movement—W. H. Oliver)
- (9) マーガレット・コール「オーエンの精神と方法」(Owen's Mind and Methods—Margaret Cole)
- (10) W. H. G. アーミテージ「オーエンとアメリカ」(Owen and America—W. H. G. Armytage)
- (11) H. デスロッシュ「19 世紀のフランスにおけるオーエン主義の影像と反響」(Images and Echoes of Owenism in Nineteenth-century France—H. Desroche)
- (12) E. ハッセルマン「19 世紀におけるドイツ社会思想および協同思想にたいするオーエンの思想の影響」(The Impact of Owen's Ideas on German and Co-operative Thought during the Nineteenth Century—E. Hasselmann)

これらの論文は、いずれも、従来あまり明らかにならなかったオーエン像の側面を追求したものであり、とくに、ドイツやフランスの思想や運動にたいする Owenism の影響を主題とする論文があげられていることは注目に値しよう。これらについて、その要点の紹介を行いながら、イギリスにおける Owen 研究の問題状況に接近することにしよう。

* * * *

冒頭のハリソンの論文は、いわばオーエン研究史を辿りながら、オーエン研究の現代的意義を探ろうとするものである。Marx や Engels、とくに Engels が、もっともしばしば言及していることはよく知られているが、オーエン主義者として、もっとも早い時期に業績を樹立したのは George Jacob Holyoake と Lloyd Jones であり、とくに後者は、'Life, Times and Labours of Robert Owen', 2 Vols. London, 1889-90 をもって知られているが、著者は、この伝記はあまり有益ではないときびしい批判を加え、むしろ、オーエン

の伝記こそ書いていないけれども、ホリオークが、自分の消費協同組合運動の宣伝のために、オーエンをうまく結びつけて考えている点を指摘し、Owen の事業の独自の解釈に成功したものと高く評価している。しかし日本での研究をみると、こうした協同組合運動と社会変革との関連のなかで、オーエンを理解するという視角に乏しい。これはわが国には、ほんとうのオーエン主義者が存在しないためではないかと考える。オーエンにたいするマルクス主義者の理解およびオーエン主義者自身の研究とならんで、注目すべきものは、フェビアン主義者によるオーエン解釈であり、その代表的著作として、Frank Podmore, Robert Owen, A Biography, London, 1906 をあげている。この著作は、オーエンおよびオーエン主義にかんする最初の学問的労作であるといわれるが、Podmore は Fabian Society の創立期のメンバーのひとりであり、同じく初期の Fabian であった Owen の孫娘 Rosamund Dale Owen と親交があり、これが機縁となって、のちに Holyoake によって、マンチェスター協同組合へおさめられたオーエン関係の豊富な資料を利用することができたといわれる (p. 2)。この同じ頃、ドイツおよびフランスにおいて、それぞれ、Édouard Dolléans, Robert Owen, 1771-1858 (Paris, 1905), Helene Simon, Robert Owen, Sein Leben und seine Bedeutung für die Gegenwart (Jena, 1905) があらわれた。

しかし著者は、G.D.H. Cole, Robert Owen, (London, 1925) を、オーエン研究にもっとも重要な貢献をしたものとして注目している。すなわち Cole は、Podmore の叙述をうけつぎ、その上に立って、教育および労働組合運動について貴重な新しい史料を加えたのであったが、しかし、協同体、アメリカおよびオーエンの後半世については、軽くふれているにとどまっているという評価を著書はしている。つぎに著者は、オーエンの自伝、Life of Robert Owen, Written by Himself, 2 Vols. (London) をもっとも読みごたえのある文章であるとしながらも、これをつぎのように批判して、読者に注意を喚起しているのは印象的である。すなわち、この自叙伝は、彼が老年になって書かれたものであり、それはある程度、1817 年以後の異なった時期に、書かれた自伝的な断片を集めてまとめられたものであり、潜在意識的に誇張や虚飾があり、その宗教についての見解は、9 歳ないし 10 歳としては信じがたいほど早熟なものであり、1792 年、Drinkwater 氏の工場での会見の様子の叙述などはあまりにもはっきりしており、誇

張があるのではないかということである。

しかしこの点については、具体的な証拠があるわけではないので、何ともいうことはできないが、著者は Podmore と G. D. H. Cole の業績をもっとも高く評価し、その上で、「Owenism への接近を、18世紀後および19世紀初頭における思想の全体的な複雑さの一部 (part of the whole complex of ideas in the late eighteenth and early nineteenth centuries) として考える (p.4) ことと、「Owenism を、あれこれの社会的もしくは知的な発展のひとつの側面として考えるのではなく、19世紀初頭の産業上の発展の完全な脈絡のなかで、その役割を吟味しなければならぬ」とのべている (p.8) のは教訓的であろう。

つぎに都築忠七氏の論文「ロバート・オーエンと革命的な政治」であるが、これは、従来、オーエンは、革命的な政治運動、たとえば、チャーティスト運動などにはまったく無関心であったことが通説とされてきたが、この論文は、新たに氏自身によって発表された史料によって、この定説に重大な修正を迫ったすぐれた論文であるということが出来る。周知のように、都築氏は、すでにその2つのモノグラフ、H. M. Hyndman and British Socialism, Oxford, 1961. および The Life of Eleanor Marx, Oxford, 1967. によって、イギリス社会主義運動史の研究家として、国際的な名声を勝ち得た最初の日本人であり、そのすぐれた実証的精神と該博な知識は、本論においても遺憾なく発揮されている。

1837年頃からはじまるチャーティスト運動にたいして、Owen がどのような態度をとったかは、従来、謎とされ、Owen の自叙伝はもちろん、その他の伝記や研究書においてもほとんどふれるところがない。都築氏の研究は、実に、この未だ明らかにされることの少なかつた部分について、氏自身が語るところによれば、「大英図書館の一隅の筐底に奥深く秘められていた」Owen の Allsop への書簡を通じて明らかにしている。

この論文を通じてきわめて興味深く、また衝撃を感じたことは、彼の1848年のフランス2月革命への熱烈な関心と国内でのチャーティスト運動の理解、およびその両者の結びつきの深さである。いうまでもなくこれは、都築氏の問題意識にもかかわっていることであるが、ともかく、1840年代 Owen の革命運動への態度を理解するために、まことに不可欠である。都築氏は、Chartists とオーエン主義との関係について、つぎのようのべている。「チャーティスト指導者の多くは、その運動のさまざまな段階において、オーエン主義

と結びついていた。そして他方、オーエンの『社会的伝道』は、チャーティストの大衆の間に浸透していた」(p.14)。しかしオーエン主義とオーエンとは同一のものではなく、むしろ労働者大衆のなかで発展させられ、その内容を豊かにされたオーエン主義は、オーエンの思想とは独立な社会変革思想としての動きを示し、暴力革命の傾向をおびるチャーティズムにたいして、批判の態度をとらせたのであり、その場合、彼の理論の根底にあるものは生産力であり、この生産力を合理的に処理する方法として、協同組合運動や協同社会の運動を構想したのであって、こうした経済的な生産力の問題から離れた政治的な革命運動に全く関心を示さず、むしろ反対であったのは当然である。

それでは Owen は政治運動にまったく無関心であったかといえば決してそうではなく、新聞などを通じて、自己の思想の浸透をはかったのであるが、しばしば指摘されるように、彼の訴えは、富裕者や知識階級を通じて行われたこと (p.21) に特徴がみられた。以上のように Owen の思想は、革命を志向する社会主義思想としての性格が稀薄であったため、その協同思想は、たとえば実力派のチャーティスト、F. O'Connor の小生産者の協同思想などにも利用されるのである。都築氏は、Podmore からの引用によって、O'Connor の 'land-scheme' が、Owen の協同思想に負うものであることをのべ、O'Connor の社会主義にたいする敵対心が増大するにつれて、land-scheme への Owenites の関心が薄れていったことを指摘しておられるが (p.19)、そのことは事実であるとしても、Owen が Ireland の救済に異常な関心を抱き、オーエン的共同社会の建設を提案していることを考えると、O'Connor と Owen には、社会改革の方向において反撥する面とともに、共通する面をもっていると考えられはしないだろうか。その共通項は、フランス革命の思想的影響ではないのだろうか。O'Connor が、フランスの援助で、イギリスと闘おうとしたということは伝説となっているが、Owen もまたその独自の革命思想を抱いて、パリに行き、1848年の革命の渦中に、一方において、Etiéne Cabet や Louis Blanc や Considérant などに会見して影響をうけ、フランス革命の危険を予知して、イギリスのチャーティスト運動の危険に想いを馳せ、ヴィクトリア女王に書簡を宛てて警告し、のちに Louis-Napoléon Bonaparte に望みを託すというように、広い行動の軌跡を示しながら、1848年の革命以後、政治の世界から離れていく模様が、本論文において、実に克

明に描写されており、非常に複雑な Owen の思想と矛盾した行動との関連を考えさせるものをもっている。ここでもまた、「Owen とは一体何者であったか」が更めて意識させられる。

都築教授は、一橋大学を出られて、現在、社会思想の教授をされている方であるが、この論文は、教授の長い外国での研究と、British Museum で教授が発見された未公開の Allsop 夫妻への書簡を史料として、Owen の知られざる反面を追求しており、考えさせられるきわめて多くの材料を含んでいる。今後の Owen 研究にとって、まことに貴重な論文となることは確実である。

つぎに、R. G. Garnett の「ロバート・オーエンと協同社会の実験」であるが、これは、アメリカでの協同社会的な実験に失敗して帰国した Owen が、彼の留守中にその影響下に建設された3つの協同社会の運動のなかで、彼がどのような態度でこれらに接したか。Owen の思想と人間性を示唆するものとして注目に値する。この論文の特徴は、Owen の業績を迎える場合に、研究者の非常に多くが、その「自叙伝」にあきりにも大きな評価と信頼をあたえているために、彼の社会主義的実験の舞台を New Lanark およびアメリカでの実験 (とはいっても Owen は、自伝では、アメリカでの協同村のことについては何もふれていないが) だけに限定しがちであり、その当時、Owenism の影響のもとに建設されつつあった協同村 (community) については大きな関心を払わなかったのに反し、Orbiston (1825-7)、Palahine (1831-3) および Queenwood (1839-45) の3つの協同村について詳細に論じている。

著者は、このような community experiments について、これこそ、その当時のオーエン主義者の最大関心事 (the intense social questioning and main preoccupation of the Owenites) であったことを指摘しているが、ただ問題とすべきは、このような熾烈な community experiments への関心が、実は、革命的な政治運動を全く必要としない社会の根本的な改革によってなされるとしたところに大きな問題がある。つまり、Owenism のもつ欠陥は、社会制度の根本的な改革が、革命的な政治運動と、どのように深いかわり合いを示すかを、理論的にあきらかに提示しえなかったことであり、そのために、「行動の主体」は、あくまでも労働者階級に求められながら、「変革の主体」は、むしろ中産階級の使命観に訴えられていることである。Owen が、政治的変革を拒否したことは、すでにさきの都築論文で

も明らかであるが、こうした態度は、本論文の筆者 Garnett が紹介する3つの共同社会の実験にたいする態度においてもみられたところであり、その場合、筆者は、1840年頃から、社会主義の一般的な主題にかんしてのさまざまな呼称について、言葉の混乱がおこったことを指摘し、「communitarian」とこれに結びついた「communitarianism」との区別すべきことを指摘する。すなわち、「communitarianism」は、小規模の協同主義的な土地居留地の制度 (a system of small co-operative land settlements) を云い、「communitarian」とは、共同体の理想の擁護者もしくは、このような共同体の構成メンバーを指すとしている (p.41)。

Owen の留守中に、Owen の思想的影響下に建設され、のちに Owen の知るところとなった3つの協同村の実験について、著者は、興味深い論評を加えている。彼はつぎのようについて、「Orbiston は、Owenism の浸透の程度いかにかわりなく重要である。何故ならそれは、経済制度の変革を通じて、労働者階級を解放しようとする目的をもって、イギリスの土壌の上ではじめて行われた協同村の実験であったからである」(p.42)。この Orbiston 協同村建設の主唱者は、ラナークの地主で Hamilton 将軍の息子 A. J. Hamilton といまひとりは、エディンバラのなめし皮業者 Abram Combe であった。「Lanark 州への報告書」が、議会によって冷たくあしらわれたあと、Hamilton は治安判事にたいし、Owen の思想にもとづく居留地を建設するために、500~700エーカーの土地を貸してくれるように提案したが、Owen はこの計画に不同意であった。Hamilton は、これによって失業者の救済を考えていたといわれるが、結局彼らは、Owen からは何の援助もうけずに、1825年3月18日、Orbiston において、自分たちの構想する community の建設を計画したのであって、彼らが、その成功を、政府や教会の援助によってえられることを期待したところに甘さがあった。Orbiston の計画は、Hamilton が、19,995ポンドを出し、Abram Combe は、スコットランドの連合保険組合 (Scottish Union Insurance Company) から、土地を手に入れるために12,000ポンドを借りるというように、実に巨額の費用がつけられたのであった。

結局この運動は、1827年8月、Combe の死と Hamilton の老衰によって次第に振わなくなるのであるが、この失敗の原因について、著者は、「基金の不安定」と「強い地方的な反目」(strong local antagonism) であつたとのべているが、それは Owenism にもとづく最

初の協同社会であったにもかかわらず、これにつづく Ralahine および Queenwood の実験はこれからその教訓を学ばなかったという (p. 46)。新しい社会にたいして、人々が適応できるようにする条件を欠いたままに、失業者を移民化したことのために失敗したのである。Owen は、1832 年、ロンドンで開かれた協同組合会議 (Co-operative Congress) において、その失敗の原因を、community の原則にもとづかないために失敗したとしており、その批判は傍観者ので冷たい。

1831-3 年に試みられた Ralahine の community experiment は、Orbiston でのそれに比べると、Owen は、これにはるかに大きな関心をよせたようである。著者 Garnett は、これについて、つぎのように述べている。「3つの指導的なオーエンの協同村のなかで、Ralahine は、その居留民の計画において、もっとも教区と結びついており、もっとも強い農業的基盤 (the strongest agricultural basis) をもった実験であった。そして、Orbiston と同じく、土地所有者である 2 人の指導的な人物、John Scott Vandeleur および労働者階級のオーエン組織者 (a working-class Owenite organizer)、E. T. Craig がこの運動を指導したのであった (pp. 47-48)。注目すべきことは、この実験が、アイルランドを舞台として行われたことである。

当時のアイルランドは、イギリスの植民地として、徹底的な収奪の対象であり、そこでの低賃金に喘ぐ農業労働者の解放は、アイルランドの民族解放運動と密接な関連をもっていたのであって、チャーティスト運動は実にこの問題を側面からとり上げたのであった。しかし Owen はもとより、こうした立場ではなかった。彼には民族解放運動の理論は欠如していたからである。アイルランドにおける Owenism の影響は、1822 年、Owen のアイルランド訪問の時にさかのぼるといわれる (p. 48)。彼の活動の中心は、1823 年、Dublin において経済問題から宗教批判に及んだが、その講演会に、カトリック教会が大きな関心を示したといわれる。そしてこのアイルランド旅行において、Owen は、Ralahine の協同村の実験の指導者 John Scott Vandeleur を訪問している (p. 49)。Ralahine の実験は、実はこの時の Owenism の影響によるものであり、その指導者 Vandeleur と Craig は、Owen 主義の原則にもとづき、農産物の下落による窮乏化を新しい農業協同体の建設によって切りぬけようとしたものであった。しかしこの Ralahine の実験がはじめられた 1831 年当時の Owen は、もはや協同村の建設に

は熱意を失い、労働交換所の運動にその関心が移っていたため、Vandeleur の破産とともに衰亡してしまった。

1839 年から 45 年にわたってかなり長い間存続しえた Queenwood の運動もまた熱烈なオーエン主義者の支援にもかかわらず失敗しなければならなかった。著者はこれらの運動の失敗の原因として、まず第 1 に、Owen が、社会変革の運動において、中産階級を指導階級 (directing class) としていたこと (p. 54)、第 2 に、これに関連して、中産階級の同調者の支持をえた Owen は、労働者階級と対立したこと (p. 59)、そして最後に、Owen は、指導する (lead) ことは知っていても、従う (follow) ことは知らなかったと述べているが、まことに尤もであると思う。

ただこの論文で問題とすべきは、著者 Garnett は、こうした Owen 主義にもとづく農村協同体の実現が、1842 年以降にはじまるチャーティスト運動のなかでの Feergus O'Connor の Land-scheme の運動とどういう関係に立つのかが明らかにされるべきではなかったろうか。この点、都築氏の論文は、Owen の Ireland 問題への関心をも含めて論じているが、とくに O'Connor が Owen の運動によるところ大きく、Owenites もまた O'Connor の Land Scheme Plan を歓迎したと述べているのに比べると、この運動の評価や分析は不十分といわなければならない。つぎに、Harold Silver の論文「教育者としてのオーエンの名声」について内容を検討しよう。

New Lanark での Owen の児童教育は、教育史上、一体どのような地位と評価をあたえられているか、これがこの論文の主題であるように思われる。教育者としての Owen にたいする評価ほど、時代的に多くの変遷をとげたものはなからう。

Victoria 時代初期の知識人たちは、たとえば Harriet Martineau や Charles Bradlaugh のような人々は、やや同情をもって、「善良で純粋ではあるが、偏狭な人」(a good, pure, one-idea man) とのべ、彼の教育は、過剰教育 (too much education) であるという観点が支配的であった。その労働者教育への献身は、公教育制度が国家的政策として打ち出されようとするとき、次第に危険なものとして感じられるようになった。

Owen はたんに、最初の幼児学校の建設者 (the founder of the first infant school) であるにすぎないというような評価が、一般的であり、19 世紀末の多くの教育史研究のなかでは、Owen はほとんど無視されつづ

てきた。1870 年代において、ようやく、Charles Bradlaugh によって、Owen はたんに「幼児学校の最初の建設者」というような表面的な理解からはなれて、その理論の中心ともいべき性格形成論の観点から問題とされるに至ったのである (p. 74)。

しかしこのように、教育者としての Owen にたいする不当な無視によって、彼の業績は忘れ去られるものではなかった。Owen の業績をたんに幼児教育のなかに解消することが問題であり、むしろ労働者教育の観点から考察するならば、ロンドン労働者協会 (London Working Men's Association) を中心とするチャーティスト運動、とくにそのなかでの William Lovett や Henry Hetherington の労働者教育の運動は、明らかに Owen の影響をうけたものであったし、Chartism につづく協同組合運動の活発化とともに、Thomas Hughes, Robert Harper, Alice Wilson, Henry Travis などの人々によって、協同組合運動における教育的活動の面から Owen が再評価されるという動きがみられた。

これは一般に、独占段階に入ったイギリス資本主義が、国民的な観点から労働力の質の向上をはかるために教育法 (the Education Act) を中心として、一連の教育政策をおしすすめるなかで、一方において Owen の偉大な役割は不当に無視される反面、他方、20 世紀に入ってからは、社会主義者とりわけ Fabian によって、労働者教育の観点から再評価されるに至ったのであって、G. D. H. Cole 夫妻や Sidney Webb 夫妻の業績が高く評価される所以である。この論文は、ともすれば、Owen をたんに児童教育の面の実践家に矮小化しようとする保守的な教育史研究と Owen の社会主義者としての立場、すなわち性格形成論を根幹とする労働者教育および協同組合運動を通じての教育的側面を重視する立場との対立を通じて、教育者としての Owen 像を明らかにしようとするように思われるが、史料の十分な操作にもかかわらず、その理論的整理は必ずしも成功しているとはいえない。

Eileen Yeo の論文「ロバート・オーエンと急進主義の文化」は、労働者教育という面では前の Harold Silver の論文の内容と深くかかわっている。Owen の一生、その活動のすべてが労働者教育の歴史であり、またそうした情熱こそが非常に多くの労働者をひきつけたのであったが、しかし Owen の労働者にたいする教育的姿勢は、民主的であるよりはむしろ家父長的であって、ここに Owen の労働者教育におけるひとつの大きな問題がある。著者は、Owen がその活動の中心とし

て組織した労働者の教育啓蒙の機関、Institution for the Association of the Industrial Classes, National Equitable Labour Exchange, Grand National Consolidated Trades Union およびその再組織ともいべき Association of All Classes of All Nations のどれをとってみても、Owen の家父長的性格を反映しないものはなかった。しかしこれは、労働者階級の運動の民主的伝統とは矛盾するものであり、やがて下からの力によって変えられなければならなかった。その例として著者は Manchester 周辺における Mechanics' Institute の運動を中心に興味深い分析を示している。Manchester の Owenites は、従来の Mechanics Institute が、中産階級的な指導者の下での「その職業に入るための科学的知識」(scientific knowledge which would enable them to 'get on' in their Jobs) を学生に授けるのではなく、「全社会にかかわる根本的な社会的および道徳的問題に焦点をあてられなければならない」(attention should be focused on the crucial social and moral questions affecting the whole community) という理由の下に、1829 年、Mechanics' Institute にたいする Owen 主義者の攻撃がはげしくなり、「新機械工学校」(New Mechanics' Institution) がわかれて出来た。この Owenites は、Manchester and Salford Association for the Dissemination of Co-operative Knowledge を 1831 年に建設するのであるが、これこそまさに、下からの Mechanics Institute の運動というべきであった。

Owen 主義者の Mechanics Institute への批判は 1829 年、'New Mechanics' Institution' の建設となったのであり、それは、従来の Institute が、年あるいは終身会費を支払う上流階級の後援者、いわゆる名誉会員 (honorary member) によって選ばれた理事会 (a board of directors) によって運営されていたという独裁的な体制の排除、民主化、労働者階級の代表の理事会への選出などが企図されたのである。

Owen と紡績工組合の指導者 John Doherty によって認められた Mechanics Hall of Science の建設と Operative Carpenter's and Joiners の、4,500 ポンドを費しての Carpenter's Hall の建設、これらは、実に中産階級的な人々による Institute の運動にたいする反応であり、ある意味では、ロンドンでの Owen の運動にも反対するものであった。

以上のように、Owenism は、Mechanics Institute の運動にたいして、ある一定の批判的態度をもって接近し、これを自己の勢力下に包摂しようとするのである

が、必ずしも成功しなかった。これと同じようなことは、その Chartist 運動にたいする態度においてもみることができる。Owenite と Chartist は、相互に共存しうる余地を充分にもつけれども、Owenism と Chartist とは 1840 年代の時期までは補完しあうことは少く、19 世紀末の新組合運動の勃興、「社会主義の復活」の過程で、それらの教訓を学び合うことになる。このような Owenism のもつ特異な一面を、J. Saville は、J. E. Smith と Owen 主義の運動との関連のなかで追求している。

Grand National Consolidated Trades Union の運動のなかで、Owen に親しく接触し、指導をうけたのは、J. E. Smith と James Morrison であった。厳格なカルヴィニストの家庭に生まれ、豊かに芸術的才能に恵まれた Smith は、婦人解放運動から Owenism へ傾倒していく。そしてキリスト教と私有財産の批判の思想を結びつけることにより、Owenism の思想に、何らか新しいものをつけ加えようとしたのである。熱烈な Owen 主義者となった Smith は、Saint-simon の諸著作の翻訳をして、キリスト教批判の態度を強め、1833 年の夏には、Owenism の機関誌 'Crisis' の編集上の仕事に従事するようになる。当時、James Morrison は、やはり Owenism の機関紙 'Pioneer' を編集しており、その思想は、Owenism と超えて、次第に Syndicalism へ移行しつつあったことにより、Smith もこの影響を受け、その相互浸透のなかで、とくに Derby の lock-out をめぐって、Owen と彼の意見は対立し、離れるようになる。著者によれば、「政治的および産業上の態度において、Smith は、Morrison と並行して活動したのであったが、Morrison ほど Owen に傾倒したことはなかった。しかしともかくも 2 人は、1834 年の初春まで、共同で行動したのである」(p. 136)。この 2 人の指導者と Owenism との対立緊張の関係は、労働組合運動をめぐる評価の問題であり、著者はこの根本的対立に加えてさらに、Smith と Morrison との思想的差異の解明にも努力していることが印象的である。

A. J. Robertson の論文「ニュー・ラナークの綿紡績業者、ロバート・オーエン、1800-1825 年」は、産業資本家、工場経営者としての Owen にたいし、興味深い接近を試みている。

Owen といえ、人道主義と理想主義にもとづく社会主義としての評価が、いわば絶対のものとしてうけとられているが、著者はここではむしろ、Owen を綿紡績資本家としての彼の経営能力、労務管理の先駆者

としての観点から、その論理を展開している。要するに温情主義の立場からする工場経営者は、Owen だけではなく、Strutts や David Dale, Samuel Greg などが居り、Owen はただ、優秀な労働力の確保と陶冶に異常にすぐれた才能を発揮した経営者としての面が強調され、技術の面での向上には、Owen は全く貢献しないとされている (p. 156)。この論文は全体を通じて、Owen の Idealism や Humanism をはぎとり、一産業資本家としての側面の暴露に全力を傾注しているかのようである。しかしそうした Owen の面が他との面と、どのようにかかわり合うかが問題である。この点の掘り下げが充分でないように思われる。

W. H. オリヴァの「1817 年のオーエン、至福千年説運動」は、1817 年、Owen が、工場法改革運動をはじめ、社会改革にのり出そうとしていた時期の彼の思想を、既成宗教としてのキリスト教へのはげしい批判にもかかわらず、至福千年説の信仰という点では、キリスト教と深いかかわり合いをもつものであることを、Owen 自身の書簡や論説およびアピールなどを通じて明らかにしたものであり、Owenism の空想的社会主義の根底にある思想を信仰の問題として扱った労作である。しかし叙述が抽象的で面白くない。

マーガレット・コールの「Owen の精神と方法」および、アメリカ、フランスおよびドイツの社会主義と Owen との関係およびそこでの Owenism の研究状況にかんする 4 つの論説については、ここでは割愛せざるをえないが、以上、最近の Owenism 研究の成果ともいべきこの論文集は、現代のわれわれにとって、どのようなことを訴えるのであろうか。

(3)

まず第 1 に、いままでその研究の空白期として理解されていた Owen の 1840 年代の活動が、かなり明らかになったことがあげられねばならない (都築論文、W. H. G., Armytage, Owen and America, p. 227, H. Desroche, Images and Echoes of Owenism in Nineteenth-Century France, p. 263)。Owen は、政治にたいして全く没交渉であったのではなく、彼自身は、時の権力者にむかって絶えず働きかけており、ただ、労働者階級が、みずから政治権力の掌握をめぐる、支配階級と対決することには完全に批判的であり、その意味では、Owenism には今日の Anarchism との関連が、Guild-socialism を媒介にして問題とされる意味があろう。しかし、この論

文集には、Owenism—Guild-socialism—Anarchism (Syndicalism) という系譜での Owen 理解によって、Marxism への対抗関係を追求する論文は見出すことができなかった。

いまひとつ重要な特徴は、Utopian socialist, Humanist, Owen というような、従来の Owen 解釈において伝統的ともいえる観点をさらに一歩おしすすめて、社会的な実験家、合理的な経営者としての側面からの彼の本質究明が目立っており、Owen の Paternalism

の分析ともならんで、彼の社会主義思想のマイナス的側面を強調する傾向もあらわれている。

全体として、Owen 生誕 200 年を契機として、Owen の研究はおしすすめられたとはいえ、それにもかかわらず、Owen は一体何物であったかという問題は、未だに解決されえない問題として、なおわれわれの前に吃立するといつては云いすぎであらうか。

—1972・7・20—

(経済学部教授)